福岡市埋蔵文化財調査報告書第1325集

藤崎遺跡21・千里遺跡２・千里向川原遺跡１

藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第２次調査・
千里向川原遺跡第２次調査の報告

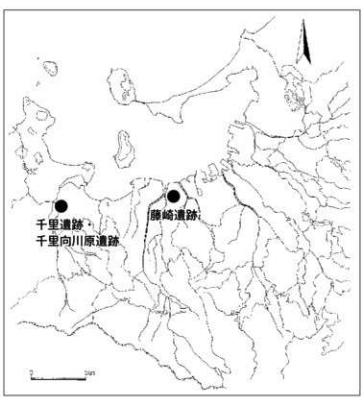
２０１７

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1325集

藤崎遺跡21・千里遺跡２・千里向川原遺跡１

藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第２次調査・千里向川原遺跡第２次調査の報告



遺跡略号・遺跡番号
FUA-33（0262）
SNR-２（1028）
SMK-２（1340）

２０１７

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発事業に伴ってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し記録保存に努めています。

今回報告する藤崎遺跡第33次調査と千里遺跡第２次調査・千里向川原遺跡第２次調査は、いずれも小規模な開発に伴う発掘調査ですが、甕棺墓群や土坑が発見され、貴重な成果を上げることができました。このような小さな調査の積み重ねが福岡の歴史を復元することにつながっております。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行までご協力を賜りました関係者の皆様には、厚く御礼申し上げます。

平成29年３月27日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1　本書は福岡市教育委員会が実施した藤崎遺跡第33次調査、千里遺跡第２次・千里向川原遺跡２次調査の発掘調査報告書である。なお、藤崎遺跡第33次調査と千里遺跡第２次調査は吉留秀敏が調査を行ったが、平成26年に逝去したため、米倉秀紀が報告を行う。
2　発掘調査および整理・報告書作成は国庫補助金で実施した。
3　各調査の調査期間及び調査担当者は次のとおりである。
　藤崎遺跡第33次調査　平成15（2003）年３月 ３日～平成15年３月12日　吉留秀敏
　千里遺跡第 ２次調査　平成22（2010）年10月18日～平成22年10月28日　吉留秀敏
　千里向川原遺跡第２次調査　平成26（2014）年１月16日～平成26年１月31日　大塚紀宜
4　各調査の遺構の実測と写真撮影は調査担当者が行った。
5　各調査の遺物の実測者は、調査担当者と下記のとおりである。
　藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第 ２次調査　米倉秀紀・萩原博文・井上加代子
　千里向川原遺跡第２次調査　大塚紀宜・山崎賀代子
6　各調査の遺物写真撮影は、次のとおりである。
　藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第 ２次調査　　米倉秀紀
　千里向川原遺跡第２次調査　大塚紀宜
7　本報告書使用図面の整図は次のとおりである。
　藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第 ２次調査　米倉秀紀・井上加代子
　千里向川原遺跡第２次調査　大塚紀宜
8　本報告書の執筆者は次のとおりである。
　藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第 ２次調査　米倉秀紀
　千里向川原遺跡第２次調査　大塚紀宜
9　本報告書の編集は大塚の協力を得て、米倉が行った。
10　本書に関するすべての遺物・図面・写真等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される。

遺跡名	藤崎遺跡群	調査次数	33	調査略号	FUA-33
調査番号	0262	分布地図図幅名	81	遺跡登録番号	307
調査地	早良区百道１丁目857-4			調査面積	90㎡
調査期間	2003.03.03～2003.03.12				

遺跡名	千里遺跡	調査次数	2	調査略号	SNR-2
調査番号	1028	分布地図図幅名	132	遺跡登録番号	745
調査地	西区大字千里字北田398番１の一部			調査面積	139㎡
調査期間	2010.10.18～2010.10.28				

遺跡名	千里向川原遺跡	調査次数	2	調査略号	SMK-2
調査番号	1340	分布地図図幅名	121	遺跡登録番号	695
調査地	西区大字千里字天蓋183番３			調査面積	55㎡
調査期間	2014.01.16～2014.01.31				

目　次

藤崎遺跡第33次調査
1　調査に至る経緯 …… 7
2　調査区の立地 …… 7
3　調査の記録 …… 8
（1）調査の概要 …… 8
（2）検出遺構 …… 10
（3）出土遺物 …… 10
4　まとめ …… 12
挿図
第1図　藤崎遺跡位置図 …… 7
第2図　藤崎遺跡調査地点位置図 …… 8
第3図　藤崎遺跡第33次調査区遺構配置図及び土層断面図 …… 9
第4図　甕棺墓実測図 …… 10
第5図　出土遺物実測図 …… 11
図版
図版1　調査区全景 …… 13
図版2　甕棺墓 …… 14
図版3　SK03・出土遺物1 …… 15
図版4　出土遺物2 …… 16

千里遺跡第2次調査
1　調査に至る経緯 …… 17
2　調査区の立地 …… 18
3　調査の記録 …… 18
（1）調査の概要 …… 18
（2）遺構と遺物 …… 20
4　まとめ …… 30
挿図
第1図　千里遺跡位置図 …… 17
第2図　千里遺跡第1次・第2次調査区位置図 …… 18
第3図　千里遺跡第2次調査遺構配置図 …… 19
第4図　掘立柱建物実測図 …… 20
第5図　土坑・土壙墓実測図 …… 21
第6図　SK05出土鉄鏃実測図 …… 21
第7図　甕棺墓実測図 …… 22
第8図　甕棺墓出土遺物実測図1 …… 24
第9図　甕棺墓出土遺物実測図2 …… 25
第10図　甕棺墓・土坑・溝・ピット出土遺物実測図 …… 26

第11図　包含層出土土器実測図１ …… 27
第12図　包含層出土土器実測図２ …… 28
第13図　包含層出土土器実測図３ …… 29
第14図　包含層出土石器実測図１ …… 31
第15図　包含層出土石器実測図２ …… 32
第16図　包含層出土石器実測図３ …… 33
第17図　包含層出土石器実測図４ …… 34

図版

図版１　上　調査区全景　　下　SK05及び同出土鉄鏃出土状況 …… 35
図版２　上　SK16　　中　SK17・18　　下　ST11 …… 36
図版３　上　ST12　　中　ST13　　下　ST14 …… 37
図版４　上　ST15　　下　甕棺群 …… 38
図版５　上　SD01・02土層断面　　下　出土遺物１ …… 39
図版６　出土遺物２ …… 40
図版７　出土遺物３ …… 41
図版８　出土遺物４ …… 42

千里向川原遺跡第２次調査

１　はじめに …… 43
（１）調査に至る経緯 …… 43
（２）調査組織 …… 43
２　遺跡の立地と環境 …… 44
３　調査の報告 …… 47
（１）概要 …… 47
（２）調査の記録 …… 47
４　小結 …… 53

挿図

第１図　調査地点位置図 …… 43
第２図　調査区位置図 …… 44
第３図　調査区全体図 …… 45
第４図　竪穴住居実測図 …… 46
第５図　土坑実測図 …… 47
第６図　土坑出土遺物実測図 …… 48
第７図　階段状遺構（SK-056）実測図 …… 49
第８図　階段状遺構出土遺物実測図 …… 50
第９図　掘立柱建物（SB-071）実測図 …… 51
第10図　調査区内出土土器実測図 …… 52
第11図　出土石器実測図 …… 52
第12図　出土土製品実測図 …… 52
第13図　千里向川原遺跡周辺地形図 …… 53

図版

図版１　調査区全景・SK-056遺物出土状況 …… 54
図版２　SK-056 …… 55
図版３　SK-037・SK-044・SP-057 …… 56

藤崎遺跡第33次調査

1　調査に至る経緯

平成14（2002）年3月3日、玄海興業有限会社から福岡市早良区百道1丁目857-4における「埋蔵文化財の有無について」が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡に含まれていることから同年6月17日に確認調査を行い、甕棺墓を確認した。申請者と協議を行い、発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は平成15（2003）年3月3日から3月12日まで実施した。3週間以内の短期調査のため、国庫補助金で調査を実施した。なお発掘調査は吉留秀敏が担当したが、在職中に逝去したため、本報告は米倉秀紀が担当した。

調査組織

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男

　　調査第1係長　力武卓治

調査担当　主任文化財主事　吉留秀敏

※文化財部は平成24年4月1日に経済観光文化局に移管された。

2　調査区の立地

藤崎遺跡は博多湾岸に広がる一連の新期砂丘上に立地する。砂丘の南側背後には後背湿地が広がり、藤崎の東側には鞍部を挟んで、西新町遺跡が乗る新期砂丘がある。博多湾岸には、同様の砂丘群が点々と広がっているが、西新町遺跡や今山遺跡では砂丘下から縄文時代前期土器が出土し、今山遺跡では、砂丘上面から縄文時代後期の土器が出土している。細かな時期には異同があるであろうが、砂丘は概

第1図　藤崎遺跡位置図（1/12,000）

ね縄文時代中期から晩期の間の海退期に形成されている。この砂丘の利用が始まるのは、概ね弥生時代前期である。藤崎遺跡においても、弥生時代前期から甕棺埋葬が始まっている。砂丘はそれ以降も形成され、藤崎地区においても、当該地区が乗る砂丘の約200m先に新しい砂丘があり、元寇防塁が築造されている。

藤崎遺跡北側半分の砂丘域は、ほぼ埋葬遺構からのみ成っている遺跡である。弥生時代前期は甕棺以外に方形周溝墓が見つかっている。同中期には甕棺埋葬が急増し、藤崎遺跡全域で多くの甕棺墓が営まれた。古墳時代になると通りをはさんだ両側で方形周溝墓群が築造される。そのうち三角縁二神二車馬鏡などの舶載鏡を副葬しているものがある。弥生時代から古墳時代初めにかけて藤崎遺跡では住居の痕跡が無く、東に隣接する西新町遺跡が居住域、藤崎遺跡が墓域であったと考えられる。

古墳時代後期以降は、砂丘の南側で住居などが営まれている。元寇防塁が築造された時期の前後には、砂丘上に東西方向の溝が掘られ、元寇時の防御線と関連する可能性がある。明治時代になると、南側の丘陵地帯に高取焼の窯が営まれ、砂丘南側で高取焼の窯道具や失敗品などが多く出土し、その後、この地区は住宅街へと変貌していく。

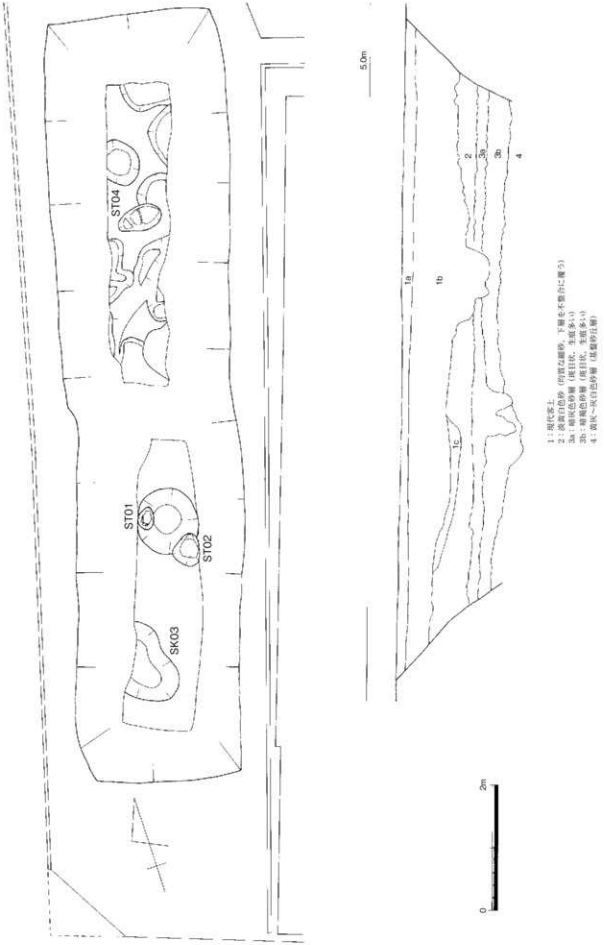
調査地点は、藤崎遺跡の北端近くに位置している。この付近は甕棺築造地区の端に位置し、本調査区でも小児棺３基が検出されただけである。砂丘はこの付近から急速に北に向かって下降していくと考えられ、調査区は墓域の北限域にあたるものと思われる。

3　調査の記録

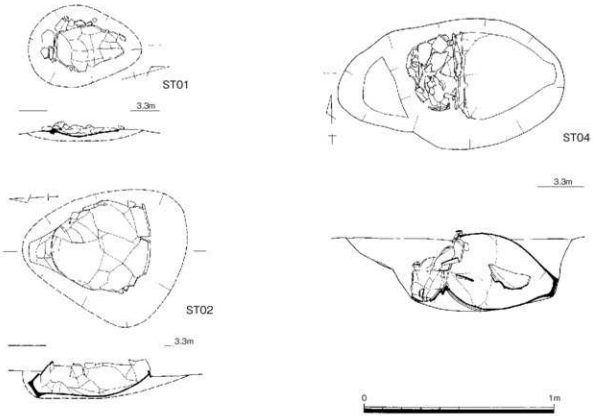
（1）調査の概要

調査区は南北に細いため、排土処理の関係上、発掘調査は南北の2区画に分けて行った。現地表面下約1.5mの砂丘層中において検出した。調査区の地表面の標高は約4.5mである。藤崎遺跡周辺は都市化が進んでいるため、概ね１m以上の攪乱層があるのが通常であるが、当調査区では攪乱層は50～80㎝で、下部ではいわゆるクロスナ層も確認した。遺構は、互層を成す黒色砂層の下部で検出した。検出した遺構は弥生時代の甕棺墓３基、古墳時代の土坑１基、時期不明の土坑６基である。

第２図　藤崎遺跡調査地点位置図（1/5,000）



第３図　藤崎遺跡第33次調査区遺構配置図及び土層断面図（1/60）



第４図　甕棺墓実測図（1/20）

（２）検出遺構

甕棺墓

ＳＴ０１（第４図、図版２）

調査区南側で検出した。甕と甕の合わせ口であるが、上甕は口縁部のごく一部しか遺存していない。下甕も削平のため遺存状況は悪い。生活用の土器を転用しており、小児棺と思われる。掘方は明瞭ではない。

ＳＴ０２（第４図、図版２）

ＳＴ０１のすぐ近くで検出した。下甕だけが出土したが、本来は合わせ口であったと思われる。掘方は明瞭ではない。

ＳＴ０４（第４図、図版２）

調査区北側で検出した。甕と壺の合わせ口で、壺は口縁部を打ち欠いている。掘方は上甕側が二段気味に掘られている。

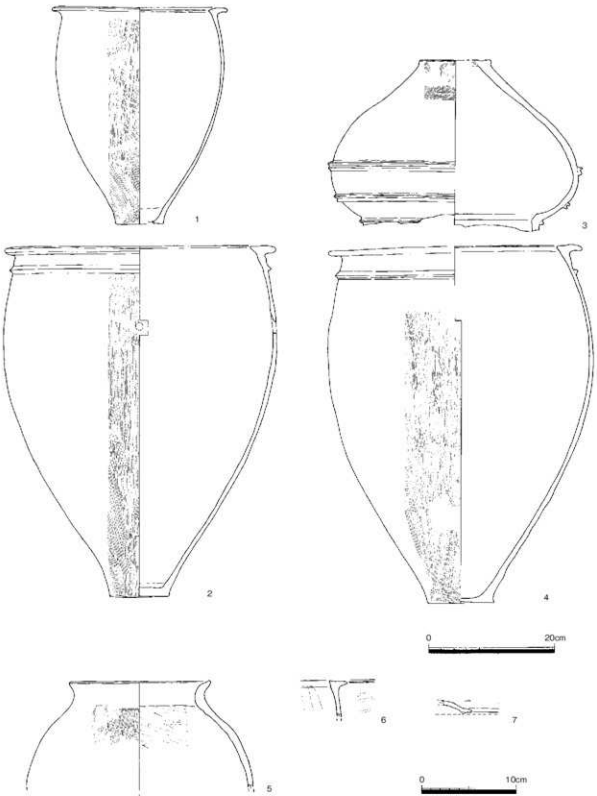
土坑

ＳＫ０３（図版３）

調査区北側端近くで検出した。不整形で深さ約20㎝を測る。人為的な土坑かどうかわからない。土坑内から土師器・須恵器・弥生土器が少量出土した。

（３）出土遺物（第５図、図版３・４）

出土した遺物は、甕棺以外はコンテナ１箱に満たない。少量の弥生土器・土師器と須恵器が１点、



第５図　出土遺物実測図（1/6，1/4）

高取焼・有田焼などの近代遺物がビニール袋１袋である。

１はＳＴ０１下甕で、口径28.0㎝、器高34.9㎝、底径7.6㎝を測る。底部から口縁部まで半分弱が遺存している。外面は縦方向のハケメ、内面はナデ・指押さえで仕上げている。日常用の甕の転用品である。２はＳＴ02下甕で、口径43.6㎝、器高56.2㎝、底径9.5㎝を測る。約半分の遺存である。頸部やや下に、焼成後の穿孔が施されている。外面胴中ほどから上に煤状のものが付着しており、やや大型ではあるが、日常用の甕の転用と考えられる。外面は縦方向のハケメ、内面はナデで仕上げている。３はＳＴ04上甕で、頸部から上を打ち欠いた壺である。打ち欠いた部分の径28.1㎝、残存部分の器高26.5㎝、底径11.6㎝を測る。底部の大半を欠失しているが、底部近くの内面も剥落している部分がある。外面胴最下部にハケメがある以外は、両面ともていねいなナデで仕上げている。両面とも橙色を呈し、外面の一部は赤色顔料に近い色を呈している。４はＳＴ04下甕で、口径40.8㎝、器高57.0㎝、底径10.5㎝を測る。胴部の一部を欠失しているだけで、完形に近い。外面は、胴上部はヨコナデ、他は縦方向のハケメ、内面はナデで仕上げている。全体明るい橙色を呈している。

５はＳＸ05出土の土師器甕で、口径15.0㎝を測る。口縁部は両面ともヨコナデ、胴部は外面ハケメ、内面ヘラケズリで仕上げている。６はＳＸ05出土の弥生土器の甕である。ねずみの齧った跡が多く、調整はわかりにくいが、ナデと思われる。外面から口唇部に赤色顔料の痕跡が点々と残っている。７もＳＸ05出土で、須恵器の坏蓋で、返りがついている。この時期の遺物は藤崎遺跡では稀である。

４　まとめ

今回の調査では小児甕棺３基と土坑１基のみの検出で、出土遺物も甕棺を除くと小コンテナ１箱に満たなかった。甕棺は遺存状況が良くなく、ＳＴ０１・０２は下甕の半分以下が残っているだけで単棺かどうかもわからなかった。時期的には３基のいずれも中期中葉で、生活用の土器を転用したものであった。砂丘面は徐々にではあるが、北に向かって傾斜しており、本調査区もしくは北側隣接地あたりが藤崎遺跡の北限と考えられる。

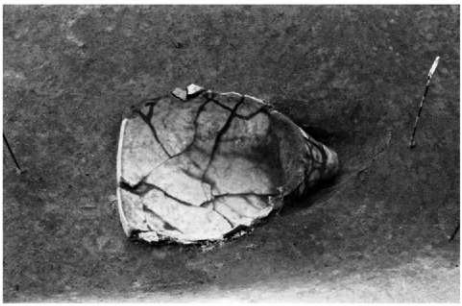
土坑ＳＫ０３からは古代の土器が出土している。当該期の遺物が砂丘上から出土するのは稀であるが、すでに藤崎遺跡の砂丘部分の大半は発掘調査が行われ、この時期の遺構群は見つかっておらず、今後の課題である。

調査区の土層断面を見ると黄白色系の砂丘層の上にいわゆるクロスナ層のような互層があるが、この層は甕棺破壊後に形成され、層内から１点ではあるが12世紀の白磁が出土しているようである。この時期は藤崎遺跡が乗る砂丘の北側に、鞍部状の低地を挟んで別の砂丘が形成されている。この砂丘には元寇防塁が築かれている。上記クロスナ層状の層は互層になっていることから、南側の砂丘トップから北側の低地に流れた層ではないかとも推察できるし、あるいは元寇防塁築造時に低地を均すために大雑把に埋めた層とも考えられるかもしれない。いずれにしろ、砂丘形成直後のものではない。

調査区全景（上：北半　下：南半）

図版２

ST01

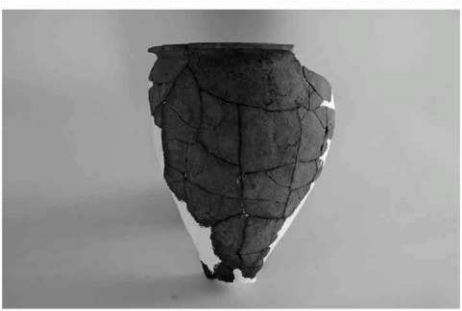


ST02

ST04

甕棺墓

SK03



1

2

SK03・出土遺物１

図版４

3

4

5～7

出土遺物２

千里遺跡第２次調査

１　調査に至る経緯

平成22（2010）年５月19日、福岡市西区大字千里字北田398番１の一部における開発計画事前協議申請書（個人専用住宅建設）が福岡市開発指導課に提出され、同年６月３日に教育委員会埋蔵文化財第１課に回覧された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である千里遺跡に含まれていることから、同年６月17日に確認調査を実施した結果、遺構・遺物を検出した。関係者と協議の結果、工事によって地下を掘削する範囲内について発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は国庫補助金の適用を受け、平成22年10月18日から10月28日まで実施した。なお発掘調査は吉留秀敏が担当したが、在職中に逝去したため、本報告は米倉秀紀が担当した。

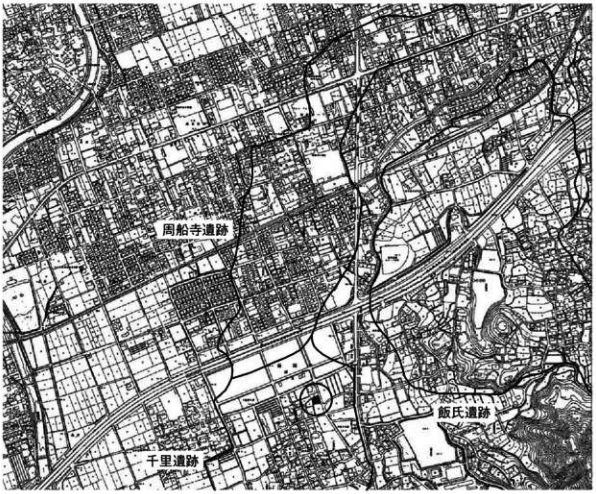
調査組織

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課

調査総括　埋蔵文化財第２課長　田中壽夫

調査担当　調査第２係長　吉留秀敏

※文化財部は平成24年４月１日に経済観光文化局に移管された。



第１図　千里遺跡位置図（1/20,000）

2　調査区の立地

千里遺跡は福岡市の西端近く、糸島平野の東縁に位置する。糸島平野は弥生時代後期に伊都国があった地域で、南側約３㎞には、伊都国王墓として名高い三雲遺跡・井原鑓溝遺跡、南西側３㎞には、平原遺跡がある。

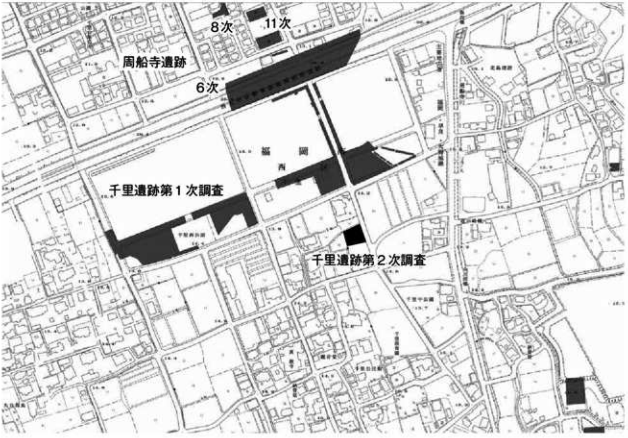
千里遺跡は、東側を周船寺川、西側を川原川に挟まれた沖積微高地上に立地している。遺跡の多くは現在の千里集落と一致している。調査区の基盤層は砂礫層で、遺跡形成以前は両川の氾濫原であったと考えられる。千里遺跡の北側には周船寺遺跡が広がっているが、ここは青白色シルト層が基盤層である。周船寺遺跡の北側は、縄文海進時には東から海が大きく湾入しており（古今津湾）、その後の海退によって、千里遺跡付近の氾濫原や周船寺遺跡のシルト層が沖積微高地化したものと思われ、周船寺遺跡では縄文時代晩期の遺構・遺物が出土している。

千里遺跡は、2009年に区画整理に伴って１万㎡以上の発掘調査（第１次調査）が行われた。

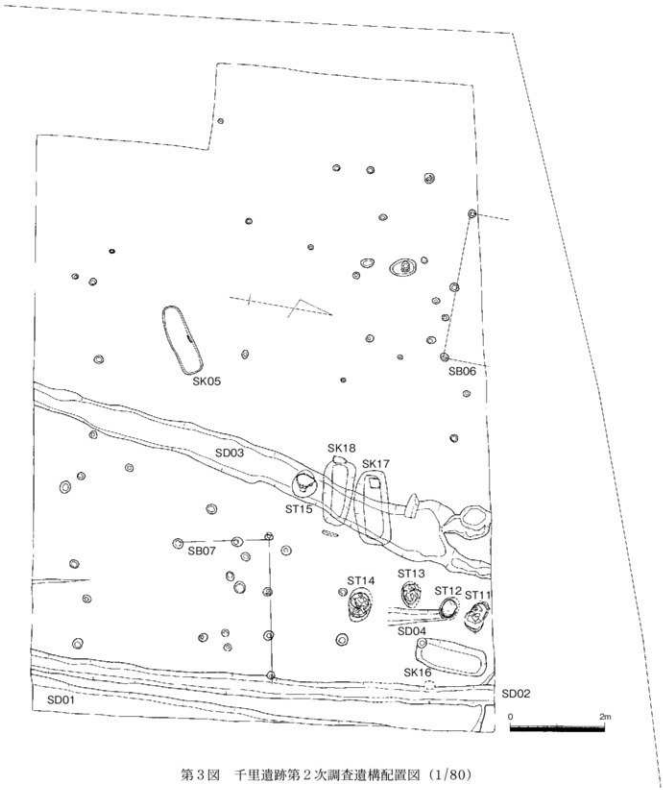
3　調査の記録

（1）調査の概要

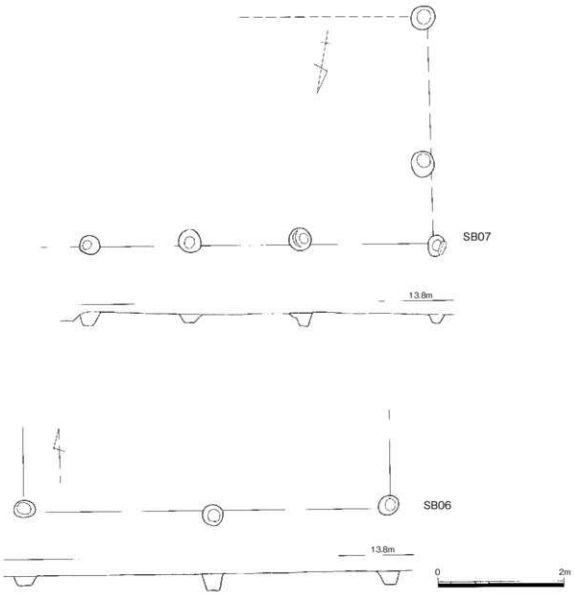
調査区は北流する周船寺川と川原川に挟まれた沖積地上にある。標高は約14ｍを測る。水田耕作土（第１層）、床土（第２層）の下に基盤層である礫層（第４層）があるが、調査区中央部に幅10～



第２図　千里遺跡第１次・第２次調査区位置図（1/5,000）



第３図　千里遺跡第２次調査遺構配置図（1/80）



第４図　掘立柱建物実測図（1/60）

12ｍの窪地があり、その部分にシルト層（第３層）が溜まっている。遺構は第３層・４層上面で検出した。また第３層には縄文時代晩期から弥生時代中期の遺物を含んでいる。

検出した遺構は、弥生時代前期以前と考えられる土坑・土壙墓３基、弥生時代前期の甕棺墓５基、弥生時代中期の溝１条、中世の土壙墓１基・溝２条、掘立柱建物２棟、近世以降の溝２条である。

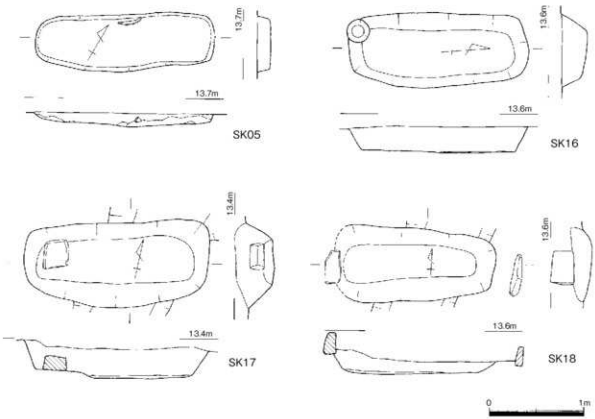
（２）遺構と遺物

①　掘立柱建物

一直線もしくは矩形に曲がっている柱列で、必ずしも建物全形を検出しているわけではない。

ＳＢ０６（第４図）

調査区北西側で検出した。柱３基が一列に並んでいる。一列の長さ3.89ｍ、柱穴の直径は20㎝前後を測る。出土遺物は土器細片が少量出土した。



第５図　土坑・土壙墓実測図（1/40）

ＳＢ０７（第４図）

調査区南東側で検出した。４基の柱穴が直線を成し、それと矩形近くに曲がる柱から成るが、直角には成っていない。桁行と考えられる４基の柱列の長さ3.66m、梁間の長さ2.40mを測る。柱穴の直径は20㎝前後である。出土遺物は土器細片が少量出土した。

②　土坑・土壙墓（第５図、図版１・２）

土坑は３基検出した。ＳＫ０５は調査区中付近で検出したが、ＳＫ１５～１７は、調査区北東隅近くで、甕棺等の取り上げ後、遺構面を若干下げて検出した。その内ＳＫ１７とＳＫ１８は平行して並んでいる。いずれも土壙墓の可能性が高いものと考えられる。

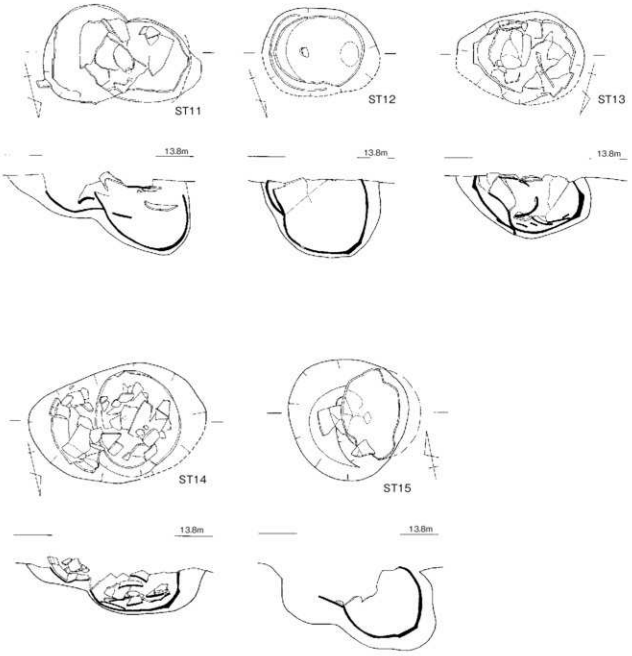
ＳＫ０５（第５図、図版１）

調査区中央付近で検出した。平面形は隅丸長方形で、長さ1.94m、幅0.6m、深さ14㎝を測る。土壙墓もしくは木棺墓と思われるが、深さ15㎝の遺存のためわからない。鉄鎌は北側長辺中央付近で出土した。床面からわずかに浮き、刃部を下に向けている。他に土師器・白磁碗の破片が出土した。

第６図　SK05出土鉄鎌実測図（1/3）

出土遺物（第６図、図版６）

１は鉄鎌で、長さ18.5㎝を測る。茎側の先端部の一部は折り返している。全面さびに覆われているため、詳細はわからない。



第７図　甕棺墓実測図（1/20）　0　1m

ＳＫ１６（第５図、図版２）

調査区北東隅の甕棺墓群近くで検出した。平面形は略長方形で、長さ1.90m、幅0.79m、深さ26㎝を測る。床面は北側半分がわずかに深く、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物（第10図）

14は大型の弥生土器の口縁部片。15は弥生土器の壺底部で、底径7.6㎝を測る。外面はミガキ気味のていねいなナデで仕上げている。赤色顔料は確認できないが、色調自体がそれに近い。

ＳＫ１７（第５図、図版２）

平面形は歪んだ長方形を呈し、長さ1.94m、幅0.90m、深さ40㎝を測る。東側小口床面に28㎝×26㎝、厚さ15㎝の四角い石が床面上にある。床面は途中で段が付き、東側１／３が６㎝前後深い。出土遺物は弥生土器と思われる破片が５片出土した。

ＳＫ１８（第５図、図版２）

平面形は小口部の長さが異なる長四角形を呈し、長さ1.75m、幅0.84m、深さ25㎝を測る。西側小口上に長さ35㎝、厚さ16㎝、高さ23㎝の石がある。また東側小口の20㎝東側にやや薄めの同様の石が立っている。ともにほぼ土坑の軸線上にあることから、土坑と何らかの関係があるものと思われる。出土遺物は弥生土器と思われる破片が４片出土した。

③　甕棺墓

甕棺墓は５基検出した。調査区北東隅近くで検出したが、ＳＴ１５は他の４基とやや離れている。５基とも概ね東西方向に埋置され、ＳＴ１１から１４が少しずれながらも平行に埋められている。

ＳＴ１１（第７図、図版２）

調査区北壁際で検出した。概ね東西方向を向いている。壺と壺の組み合わせであるが、上の壺は口縁部を打ち欠いている。掘方は二段に掘られている。

出土遺物（第８・10図、図版５）

２はＳＴ11上甕で、口縁部から胴中央部付近の約半分のみが遺存している。復元口径31.8㎝を測る。口縁部は打ち欠いている。沈線は確認できないが、胴上部から頸部に移る部分でわずかに屈曲している。両面とも淡い灰黄褐色を呈している。器面の状態はあまり良くなく、指またはヘラ状工具で全面をなでていると思われる。内面は一部指でけずり気味のナデ、指押さえを施している。

３はＳＴ11下甕で、口径36.5㎝、器高58.5㎝、底径11.4㎝を測る。胴部中央から口縁部にかけての一部を欠失している。口縁部は半分強が遺存しているが、そのうちの２／３の端部を打ち欠いている。頸部に１条と、胴上部にやや不明瞭な沈線が１条施されている。両面ともヘラ状工具または指でていねいになでている。両面ともにぶい橙色を呈している。10・11は甕棺墓壙内から出土した弥生土器。10は鉤先口縁の甕、11は袋状口縁の壺で両面に赤色顔料が部分的に遺存している。

ＳＴ１２（第７図、図版３）

ＳＴ１１のすぐ南側で検出し、ＳＴ１１とほぼ同方向を向き、埋置角度もＳＴ１１に近い。上甕はごく一部しか遺存していない。下甕は口縁部を打ち欠いている。

出土遺物（第８・10図、図版５）

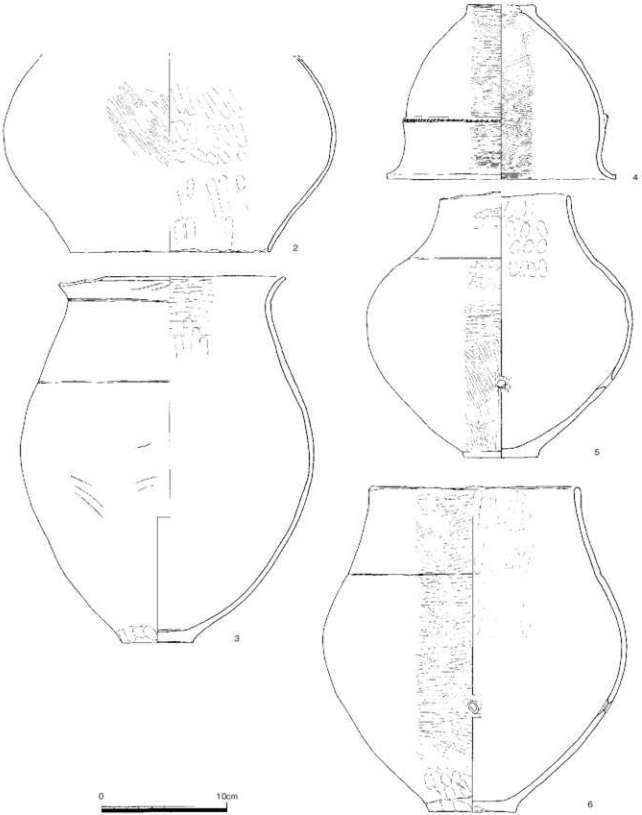
６はＳＴ12下甕で、口径32.8㎝、器高52.0㎝、底径13.4㎝を測る。頸部から口縁部にかけての１／３を欠失している。口縁部は全面打ち欠いている。胴上部に沈線を１条施す。また胴下部には１㎝ほどの穿孔が焼成後に施されている。全面指またはヘラ状工具によってなでている。両面とも橙色を呈しているが、小さな赤い部分が外面に数か所確認できるが、顔料かどうかわからない。12はＳＴ12墓壙内から出土した弥生土器の鉢である。

ＳＴ１３（第７図、図版３）

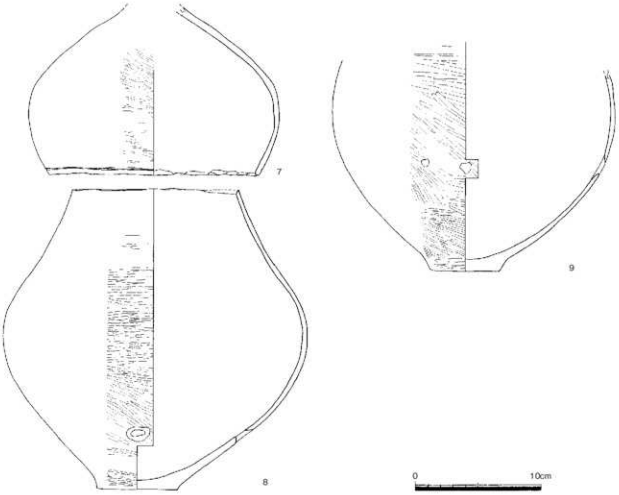
ＳＴ１２のすぐ南で検出しＳＴ１１・１２とほぼ一直線上で、かつほぼ同間隔であるが、埋置方位が若干異なっている。また、埋置角度もＳＴ１１・１２よりやや平行方向である。下甕は口縁部打ち欠きの壺、上甕は鉢である。

出土遺物（第８図、図版５）

４はＳＴ13上甕で、口径28.3㎝、器高28.1㎝、底径10.8㎝を測る。胴部中央から下部の一部と、底部の大半を欠失している。口縁部は端部をつまみ出している部分が大半である。口唇部はヘラ状工具でなでている。胴上部の突帯状の段部分は粘土の継ぎ目部分で、下部の体部に覆いかぶせるように粘土を厚く載せており、貼り付け突帯ではない。突帯の頂部に0.5～１㎝おきにヘラ状工具でつけた刻み目を施している。両面とも指またはヘラ状工具でていねいになでて一部は研磨状を呈している。



第８図　甕棺墓出土遺物実測図１（1/6）



第９図　甕棺墓出土遺物実測図２（1/6）

外面は灰黄色～白色に近く、内面は全面黒色に近い。外面胴下部に赤色部分が点々とあるが、顔料かどうかよくわからない。

５はＳＴ13下甕で、口径21.2㎝、器高42.5㎝、底径11.8㎝を測る。胴中央の一部のみを欠失する。口縁部は全面打ち欠いている。また胴下部に径１㎝強の穿孔を焼成後に施しているが、焼成後にもかかわらず、ほぼ正円を成している。胴最上部付近に沈線を１条施しているが、不明瞭な部分が多い。外面は指またはヘラ状工具によるナデ、内面は指頭指押さえまたはナデで仕上げている。両面とも白色に近いにぶい黄橙色を呈している。また底部に近い胴下部に、赤色を呈している部分がある。

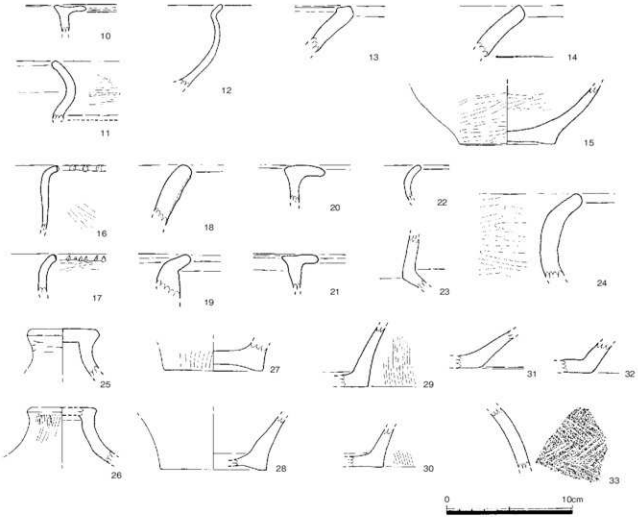
ＳＴ１４（第７図、図版３）

ＳＴ１３の南側で検出した。ＳＴ１１から１３の列からやや東側にあるが、埋置方位はＳＴ１１・１２に近い。埋置角度はＳＴ１３に近い。下甕・上甕とも口縁部打ち欠きの壺である。

出土遺物（第９図、図版６）

７はＳＴ14上甕で、胴部の約半分と底部を欠失する。口径33.5㎝、現存器高27.0㎝を測る。頸部に横方向の沈線が１条施され、その部分から上の頸部と口縁部は打ち欠いている。両面ともナデ調整で仕上げている。

８はＳＴ14下甕で、口縁部から胴上部の半分を欠失している。復元口径26.6㎝、器高48.0㎝、底径13.0㎝を測り、口縁部は打ち欠いている。また胴下部に焼成後に穿孔を施している。沈線は確認できない。両面とも指またはヘラ状工具によるナデで仕上げている。胴中央と上部の２か所の粘土



第10図　甕棺墓・土坑・溝・ピット出土遺物実測図（1/3）

接合部は、内面を横方向に強くなでている。胴中央部外面の黒斑以外は、両面とも橙色を呈している。

ＳＴ１５（第７図、図版４）

ＳＴ１１～１４の南西３ｍのところにあり、ＳＫ１７・１８と３基が近距離で並んでいる。下甕は口縁部打ち欠きの壺で、上甕はほとんど遺存していない。

出土遺物（第９・10図、図版６）

９はＳＴ15下甕で、口径45.3㎝、器高37.2㎝、底径10.5㎝を測る。胴上部から上は遺存していない。胴下部に穿孔を２つ焼成後に施している。外面はヘラ状工具でケズリ気味にナデを施しているが、底部近くにハケメ状の痕跡があり、ハケメを施した後にヘラで調整している。内面はナデで仕上げている。全面にぶい黄橙色を呈している。13～15はＳＴ15墓壙内から出土した。13は・14は大型土器の口縁部で、15は壺の底部である。

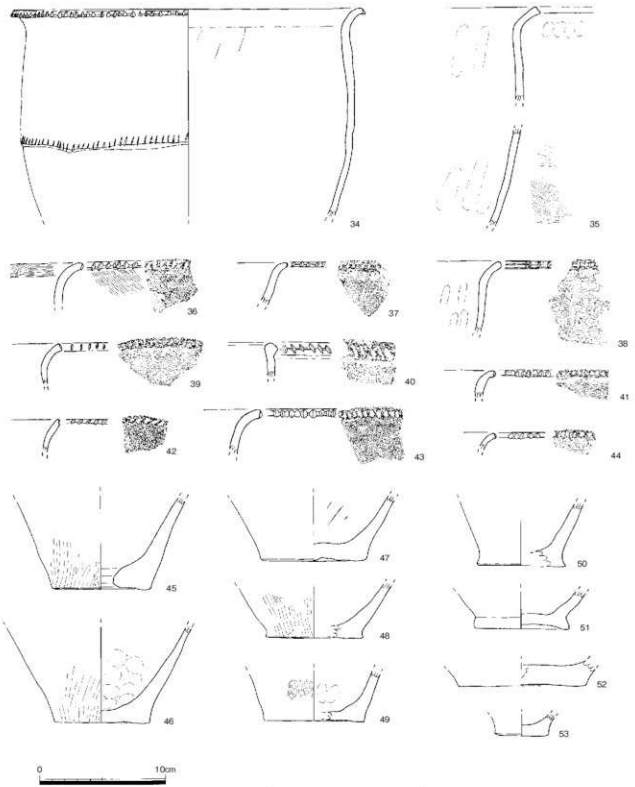
④　溝

ＳＤ０１（図版５）

調査区東壁近くをほぼ南北に走る。溝の東側立ち上がりは調査区の外にあるが、溝の断面形は逆台形を呈すると思われる。近世以降と思われる。

ＳＤ０２（図版５）

ＳＤ０１のすぐ西側を走るが、ＳＤ０１とはわずかに方向が異なっている。南北方向からやや西に振れている。溝幅約50㎝前後、深さ５～10㎝で、断面形は逆台形を呈している。出土遺物は弥生土



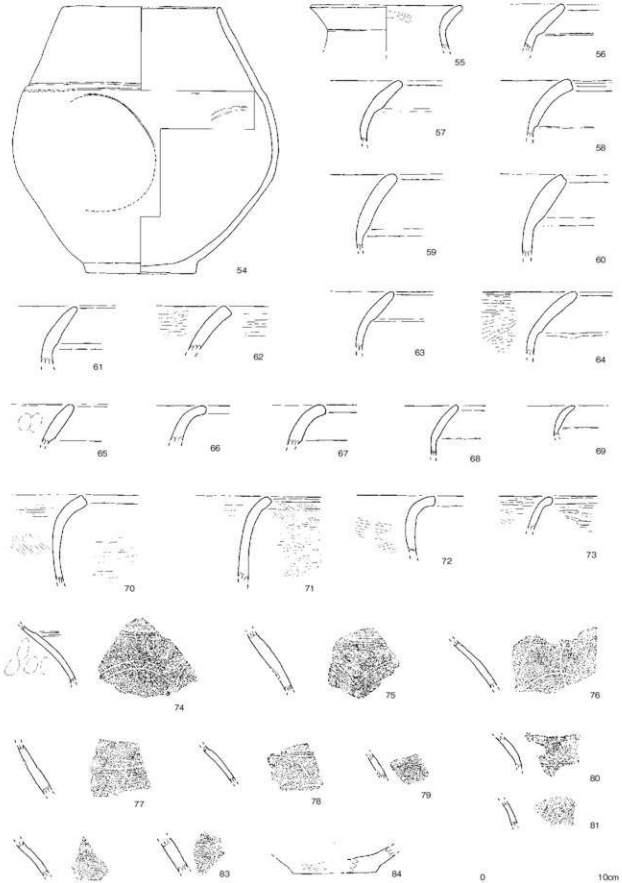
第11図　包含層出土土器実測図１（1/3）

器の細片が４点のみである。

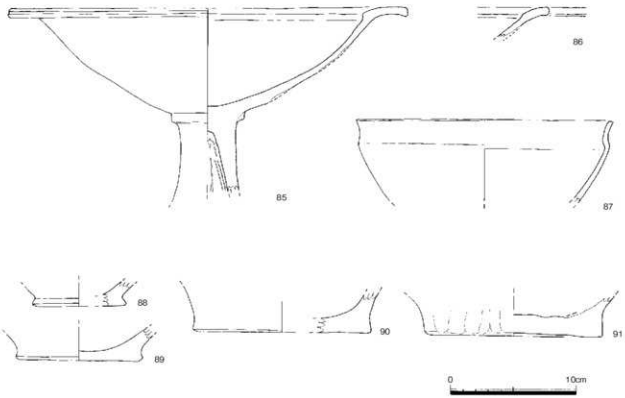
ＳＤ０３・０４

調査区中央付近を南北方向に走る。調査区北壁近くで溝幅が広くなり２方向に分かれる。

ＳＤ０３の延長は分離部分から幅を狭めている。分離した溝は方向をやや西に振っている。南から



第12図　包含層出土土器実測図２（1/3）



第13図　包含層出土土器実測図３（1/3）

来た水を導入していると思われる。出土遺物は土器片などが大ビニール袋１袋分出土した

出土遺物（第10図、図版７）

16～21は弥生土器の甕の口縁部である。16は外面にハケメがかすかに残る。18は器壁が厚くやや異質で、甕でないかもしれない。19も器壁が１㎝以上と厚い。20・21は鉤先口縁である。22～24は壺の口縁部・頸部である。23は外面に赤色顔料が付いている。24はかなり口径の大きな壺である。27～30は甕の底部、31・32は壺の底部である。25・26は蓋である。

⑤　ピット出土遺物（第10図、図版７）

33は調査区東端にあるピット２の出土。壺の胴上部に少なくとも３段の羽状文を沈線で描く。

⑥　遺物包含層出土遺物

土器（第11～13図、図版６～８）

34～86は遺物包含層（３層）上部、87～90は同下部で出土した。34～53は弥生土器の甕である。34は口径28.0㎝を測る。口縁部は短く外反し、口唇部に刻目を施している。胴部最大径付近に、わずかに突帯状を呈した部分に刻目を施しているが、突帯状の部分は貼り付けではなく、ヘラで突帯状の部分の直下を削り取り、段状の突帯を作り出している。両面ともヘラ・指によるナデで仕上げている。35は数片あるが、接合しない。口縁端に刻目は無い。器表面の遺存は悪く、外面にハケメがかすかに確認できる。36～44は口縁端に刻目を持つ甕の口縁部である。小破片が多く、傾きが疑問なものもある。36のみ外面と口縁部内面にハケメを施しており、他はナデ・指押さえで仕上げている。40以外は口縁部が短く外反する。45～53は甕の底部である。45は底部中央に焼成後の穿孔が施されている。調整は、45・46・48・49が外面にハケメを施し、他はナデで仕上げている。

54～84は壺である。54は無頸壺で、全体の1/3を欠失している。口径12.6㎝、胴部最大径20.9㎝、器高21.2㎝、底部径12.6㎝を測る。胴部最大径は胴部中ほどにある。また胴上部には沈線気味の段

がある。器面の状況は悪い。段の下に、直径10㎝前後の、いわゆる窓がある。窓の部分が遺存しているのは全体の１／４ほどであるが、焼成前に窓をあけている。弥生時代前期の土器で窓があるものは極めて異例である。窓の右側に、横方向の沈線状の痕跡と、弧文状の痕跡らしきものが観察できるが、他の場所では確認できず、明瞭では無い。外面の遺存状況が悪いため、調整は不明瞭であるが、ミガキに近いナデと思われ、内面はナデで仕上げている。両面ともやや淡目の黄橙色を呈している。

55は口径12.0㎝の小形壺で、頸部に沈線を１条施している。56～73は壺口縁部の小片である。器表面の遺存はあまりよくないものが多いが、調整は両面ともミガキもしくはていねいなナデがほとんどと思われる。67の外面には赤色顔料がわずかに残っている。70・71は大型の壺と思われる。70は内面にハケメが確認でき、ハケメを施したのち、ナデで仕上げている。外面は赤い部分があり、顔料を塗布しているかもしれない。71は外面には赤色顔料が全面に塗布されている。

74～83は壺胴上部の破片で、上部に横方向の沈線を数条、その下に重弧文または羽状文を施している。84は底部片で、底部径6.6㎝を測る。

85は高坏で、口径32.6㎝を測る。坏部直下に突帯を１条持つ。外面は器表面の剥離がひどく、わずかに残っている部分はミガキかていねいなナデによって仕上げ、白色に近い淡黄白色を呈している。内面は全面黒色で、ミガキに近いていねいなナデ調整である。筒の部分も内面は全面黒色でシボリ痕がある。外面はやはり遺存状況が悪い。86も高坏の小片である。87は鉢で、口径20.2㎝を測る。

88～91は遺物包含層（第３層）下部出土の土器で、いずれも甕の底部である。底部径は88が7.4㎝、89が10.0㎝、90が14.0㎝、91が14.0㎝を測る。

石器（第14～17図、図版８）

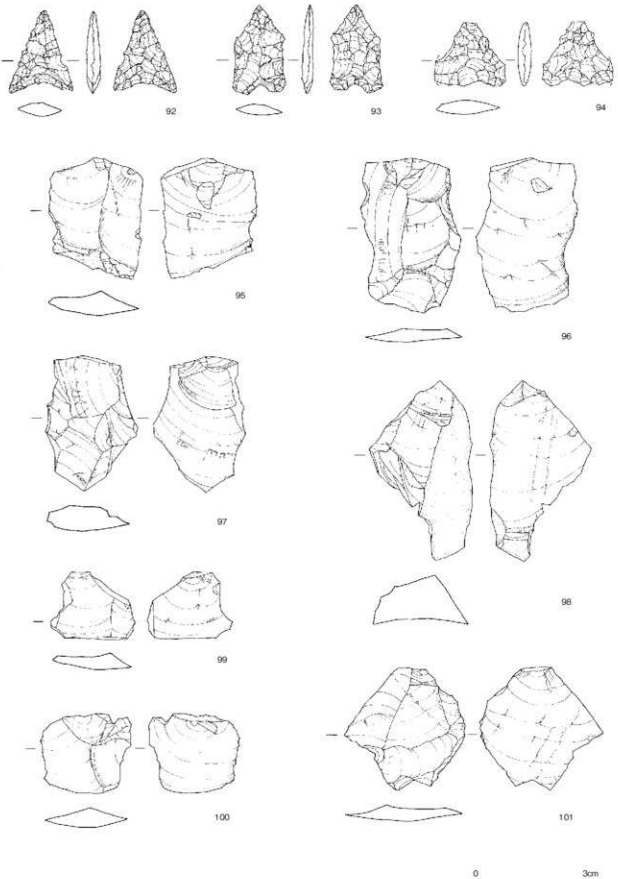
黒曜石や安山岩などの石器・剥片が浅いコンテナ１箱出土した。92～94は黒曜石製石鏃で、92は長さ2.22㎝、93は2.33㎝、94は1.66㎝を測る。95～103は剥片で、いずれも腰岳産と思われる。104～111は石核で、角礫に近い小型の石材または剥片を使っている。いずれも腰岳産と思われる黒曜石を利用している。104は横長の剥片石核。106は古いパティナの剥片を利用している。112は腰岳産黒曜石製のスクレイパーで、長さ3.25㎝を測る。113は黒色黒曜石製のスクレイパーで長さ3.33㎝を測る。114は花崗岩製の敲石で、ほぼ立方体の形状を呈する。現状の長さ6.56㎝を測る。115は玄武岩製か。扁平片刃石斧と考えられる。幅3.38㎝を測る。116は安山岩製で、三側縁を調整している。石斧の未成品の可能性がある。117は大型のサヌカイト。立方体に近い原石の両面から剥片を剥出している。

4　まとめ

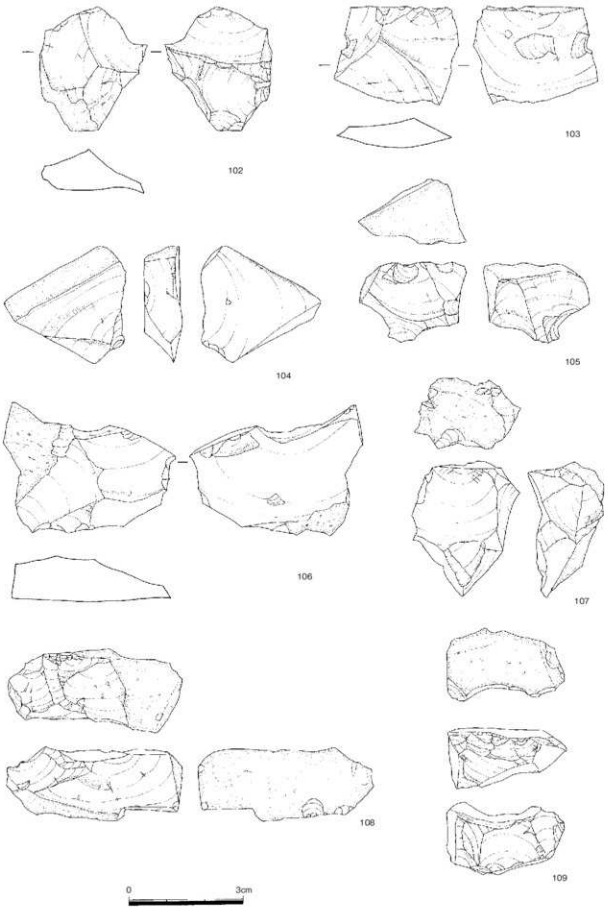
本調査区は礫層を基盤とする沖積地上に立地しており、調査区中央部の窪地にはシルト層が堆積し、縄文時代晩期～弥生時代中期の遺物が含まれている。検出した遺構は弥生時代前期の甕棺墓・土壙墓を主体とするが、甕棺はすべて上部を削られており、最低でも50㎝以上を後世にカットされている。

上記のシルト層は調査区全体を覆い、上記遺構群はシルト層上面から掘り込んでいた可能性も考えられる。当遺跡北側に隣接する周船寺遺跡では、白色系のシルト層上に弥生時代前期の遺構が掘られている。ただし、周船寺遺跡はシルト層の下が黒色粘質土系の土で、シルト層自体には縄文時代晩期の土器が含まれる地点はあるが、弥生時代は基本的にはシルト層形成以降である。

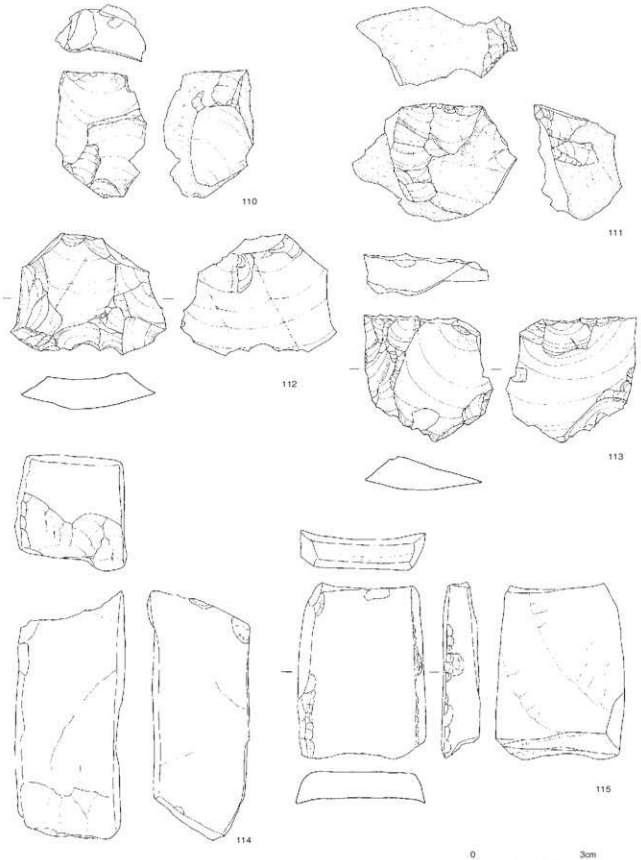
本調査区のシルト層には縄文時代晩期から弥生時代中期の遺物を含んでいることから、窪地内にたまった二次堆積の層と考えられる。当地周辺は、縄文時代中期以降の海退によって陸化した沖積微高



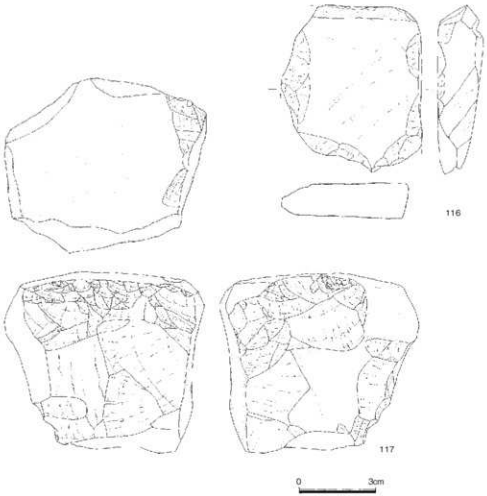
第14図　包含層出土石器実測図１（1/1）



第15図　包含層出土石器実測図２（1/1）



第16図　包含層出土石器実測図３（1/1）



第17図　包含層出土石器実測図４（2/3）

地であると考えられ、福岡市室見川沿いの早良平野でも、橋本一丁田遺跡や福重稲木遺跡など、沖積微高地上に弥生時代早期から前期の遺跡が営まれ、これらは水田可耕地を求めた結果であろう。

当調査区では、概ね板付Ⅱｂ式の前半期を中心とする土器群が包含層から出土し、５基の甕棺墓と３基の土壙墓も同じ時期と考えられる。弥生時代早期・前期初頭からやや下った時期とはいえ、沖積微高地上に墓群が形成されるのは注目できる。また、包含層があるとはいえ、当調査区では墓以外の遺構は皆無で、住居などの生活遺構は北側の周船寺遺跡にあるものと思われ、住居と墓域が分かれて、それがともに沖積微高地上にあるというのは当遺跡と周船寺遺跡の小さな特徴の一つである。

出土した弥生時代前期の土器の内、54の土器は胴部中央に円形の焼成前にあけた孔を有するもので、いわゆる窓付き土器と呼ばれるものである。窓付き土器は弥生時代中期以降、福岡周辺では特に後期に盛行するが、前期のものは管見例ではない。系譜的なつながりはないものと思われるが、この土器は、製作時から無頸の形態をしており、用途も含めて注目してよい土器である。

調査区全景

SK05

SK05 鉄鎌出土状況

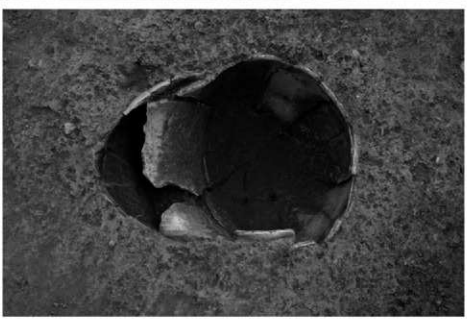
図版２

SK16

SK17・18

ST11

ST12



ST13

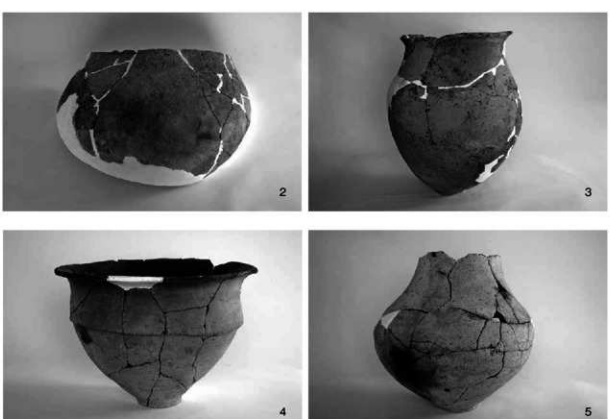
ST14

図版 4

ST15

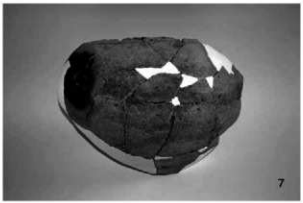
甕棺群

SD01・02土層断面

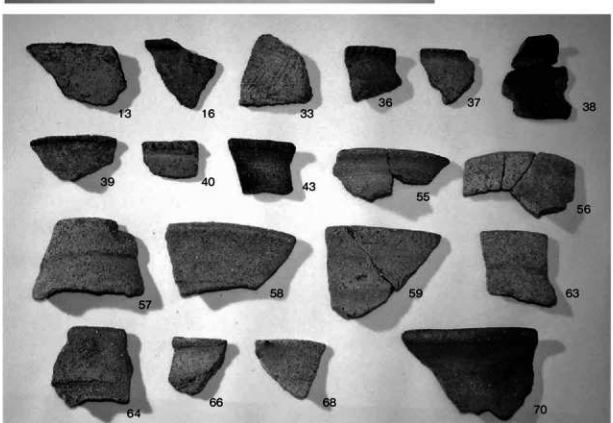


出土遺物1

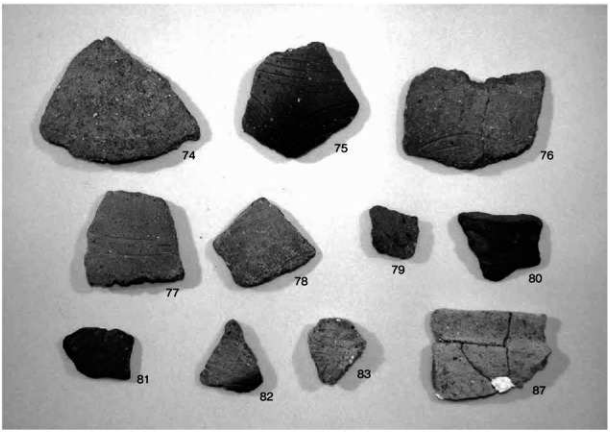
図版6



出土遺物2



出土遺物３


74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
87

92
93
94
96
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
115

出土遺物４

千里向川原遺跡第２次調査

１　はじめに

（1）調査に至る経緯

平成25年10月4日、福岡市開発指導課に福岡市西区大字千里字天蓋183番3における開発計画事前協議申請書（照会番号25-2-749）が提出され、同年10月10日に福岡市教育委員会に回覧された。この開発計画事前協議申請書に基づき、埋蔵文化財審査課（現：埋蔵文化財課）事前審査係は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である千里向川原遺跡に含まれていることから、平成25年11月21日に確認調査を行い、その結果、現地表面下25cmで住居や土坑、柱穴とみられる遺構を検出し、弥生時代の集落が遺存していることを確認した。この結果を受けて埋蔵文化財審査課は遺構の保全等に関して申請者と協議を行い、予定建物部分については改良杭工事を行うことから遺構面以下に影響が及ぶため、この範囲について発掘調査を実施することで合意した。なお建物の外側の部分については道路高まで盛り土を行うが遺構面には影響がないため、慎重工事と判断し、遺構は現状保存されている。

予定建築物が個人専用住宅であったことから発掘調査は国庫補助金の適用を受け、平成26年1月16日から同年1月31日まで実施した。調査面積は55㎡である。

（2）調査組織

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成25年度　資料整理・報告書作成：平成28年度）

調査総括：経済観光文化局埋蔵文化財調査課長	宮井善朗（平成25年度）
同課調査第２係長	榎本義嗣（平成25年度）
経済観光文化局埋蔵文化財課長	常松幹雄（平成28年度）
同課調査第２係長	加藤隆也（平成28年度）
事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係	比嘉えりか（平成25年度）
調査担当：埋蔵文化財調査課調査第２係主任文化財主事	大塚紀宜（平成25年度）
庶務：埋蔵文化財審査課（埋蔵文化財課）管理係	横田　忍（平成25・28年度）
埋蔵文化財課管理係長	大塚紀宜（平成28年）

第１図　調査地点位置図（1/5,000）

2　遺跡の立地と環境

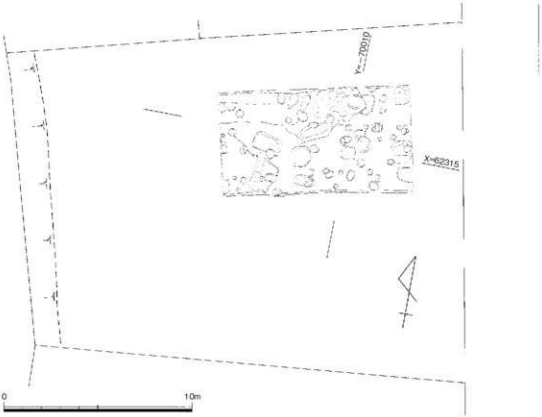
千里地区は、高祖山から広がる丘陵の端部、及びその西側に広がる低地部分からなる。低地部分は以前より水田として利用され、集落が点在する光景が広がっていた。202号バイパスの開通に伴い都市の開発が及ぶにつれて宅地や商業地が新たに作られている。

一方、丘陵上は近年まで開発の波が及ばず、昭和50年代に県立高校が新設された他には大きな開発は進まなかった。しかし既存の住宅の建て替えに伴い、集落内での申請案件も近年増加している。今後、九州大学の移転等による居住・商業の開発地としてのポテンシャルを内包している地区である。

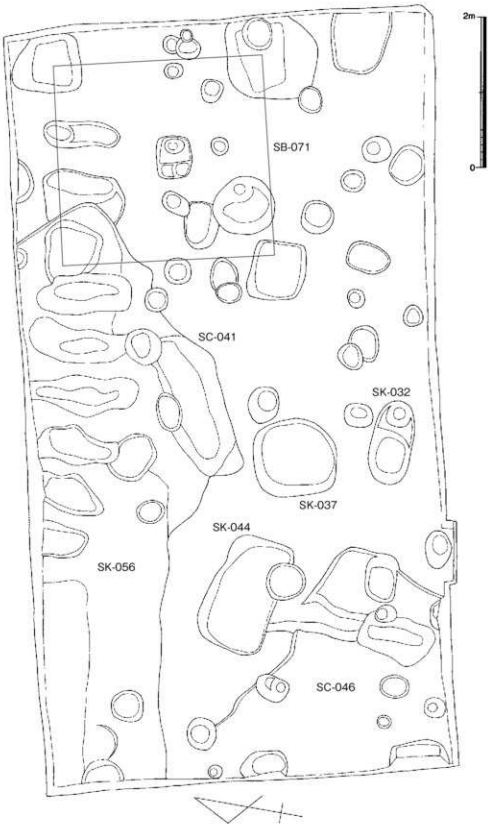
千里向川原遺跡は丘陵の北西端に位置し、県道早良・大野線を境に東側は丘陵から北向きに舌状に伸びる狭小な尾根であり、尾根上に遺跡が立地している。県道より西側の、周船寺川右岸流域は河川堆積による低地であり、西側に隣接する千里遺跡に連続するものと考えられる。

福岡市教育委員会による千里向川原遺跡の調査は、平成13年に第1次調査が行われたが、これは工事に伴う緊急的な調査で、ごく狭い範囲での遺構確認と土層の観察を行うことができたに過ぎない。場所は今回の第2次調査の北西側80mで、弥生時代の遺構が密に分布している状況を確認している。（福岡市教育委員会編2003『福岡市埋蔵文化財年報VOL.16』PP.74-75）

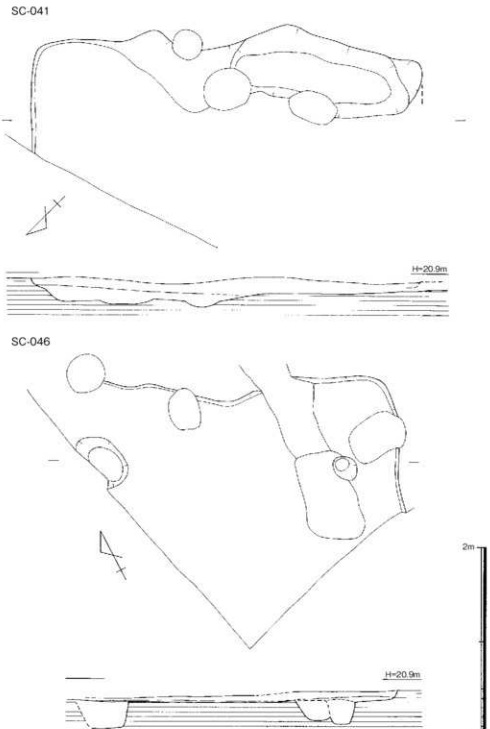
これまで本遺跡で福岡市教育委員会が実施した調査は本調査も含め2回しかなく、遺跡の全容を語るには程遠い。しかし西側に隣接する千里遺跡（千里シビナ遺跡も含む）の縄文～弥生時代の様相や南側に隣接する奈良時代の山城である怡土城址の歴史的背景や調査結果は、千里向川原遺跡の置かれた歴史的状況について考える際に参考となるものである。



第２図　調査区位置図（1/200）



第３図　調査区全体図（1/50）



第４図　竪穴住居実測図（1/40）

3　調査の報告

（1）概要

千里向川原遺跡第2次調査地点は、福岡市西区と糸島市の境界に位置する高祖山（標高415m）の北西側に広がる尾根の端部に位置する。丘陵は調査地点付近を北流する瑞梅寺川の扇状地に接しており、千里向川原遺跡は上記の尾根部分と扇状地にまたがって北に細長く伸びる遺跡として設定されている。

第2次調査地点は、北に伸びる尾根上面の西側端部にあたる。敷地は東西に長い長方形を呈しており、敷地内は西に向かって緩く傾斜しており、調査時点で北東隅と西端の比高差は70cmを測る。西側敷地境界は隣接地から2m以上の段差を持って高くなっている。調査前は畑地として使用されており、近隣の方の話では昭和40年代から畑地だったということで、昭和50年代初頭の菓子の包装が撹乱中から出土している。敷地面積は395.78㎡、そのうちの建物部分55㎡を調査対象とした。

調査は平成26年1月16日から開始し、1月31日に終了した。実働期間は土日と雨天日等を除いた8日間である。

調査の結果、畑地耕作土を深さ15cmほど除去した明橙色粘質ローム層の上面で遺構を検出した。遺構覆土は黒色土で、遺構同士の切り合いは土色の調子の区別が困難なために十分に判断できなかった部分がある。検出した遺構は竪穴住居、掘立柱建物、土坑、柱穴などであるが、古代の階段あるいは通路とみられる遺構が検出されており、特筆すべき内容となっている。

出土した遺物は土器、土製品、瓦、石器等であるが、土器は細片が多く、器形が判明するものや実測図の作成が可能なものは非常に少ない。遺物総量はパンケース6箱相当である。

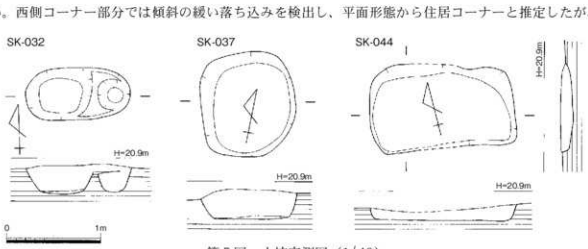
（2）調査の記録

1）竪穴住居

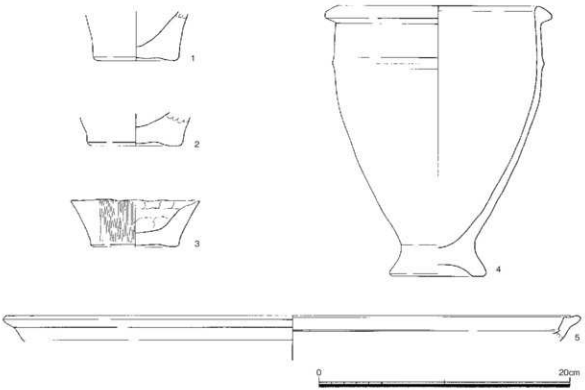
SC-041（第4図）

調査区北側で検出した方形の竪穴住居で、住居の軸は北西－南東方向に向く。住居の平面プランとして明瞭に確認できるのは東隅部分だけで、南隅部分はごく一部のみが確認できる。この両隅より、一辺4.0mの方形プランの竪穴住居と推定した。住居北側は調査区外に広がる。

東側コーナー部分では、遺構検出面から8cmの深さで壁が遺存しており、かなりの削平を受けていることが想定できる。東側コーナーから北西に直線的に壁が延びているが、壁溝などは確認できない。西側コーナー部分では傾斜の緩い落ち込みを検出し、平面形態から住居コーナーと推定したが、



第5図　土坑実測図（1/40）



第６図　土坑出土遺物実測図（1/3）

楕円形の土坑（SK-055）の一部と重複しており、本来の住居隅部の形状をとどめているかどうか疑問である。またSK-055は平面形の軸線が住居の方向に一致し、住居に伴う土坑の可能性もある。

階段状遺構SK-056と切り合っていたが、切り合い関係を明らかにすることが困難であり、住居床面を確実に捉えることができなかった。また住居に伴う柱穴も判明せず、住居構造は不明である。

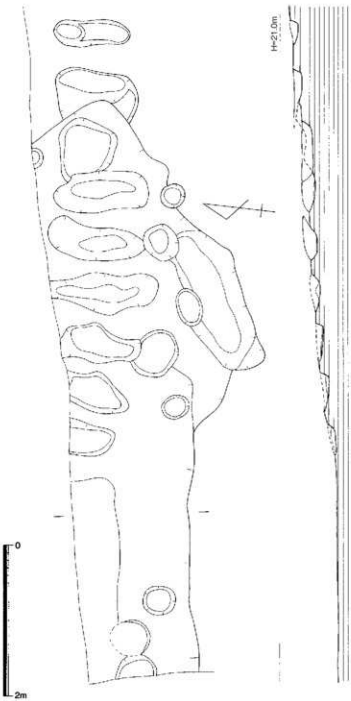
出土遺物（第６図）住居内からの出土遺物はビニール袋1袋と少量で、細片が多く図示可能なものは非常に少ない。また上記のようにSK-056との切り合いが区別できなかったため、古代の遺物も多く含む。5は緑釉陶器の盤で、ごく小片であるものの径を復元し、口径45.4cmの大型の盤とした。釉色は明オリーブ灰色で、図示できなかったが外面に波状文があるとみられる。この他の遺物は土師器あるいは弥生土器の小片がほとんどである。

SC-046（第４図）

調査区南西側で検出した方形の竪穴住居で、住居の南側と西側は調査区外に及ぶ。また住居西側部分は削平のため平面プランを一部確認できなかったが、一辺3.6m以上の規模であることは確実である。住居東側コーナー部分では遺構検出面から5cmの深さで壁が遺存しており、この住居も相当の削平を受けている。北東側の壁は若干蛇行しているが、これも非常に削平されたために壁の立ち上がりの微妙な高低差を捉えたと考えられ、本来は壁が直線的に延びていたとみられる。住居南西側の壁も蛇行気味に延びている。

住居周辺には柱穴が多数重複しているが、このうち位置関係より2基の柱穴（SP-051、SP-053）が住居に伴うものと考えられ、住居は4本柱だったと考えられる。

出土遺物　住居覆土からの出土遺物はいずれも細片で、実測可能なものはない。胎土より、弥生土器または土師器とみられる。



1：黒褐色土　粘質土で、弥生中期の土器小片を多く含む。
2：褐色土　黒色土をしみ状に含む。最下面に小礫と瓦が敷かれる。

第７図　階段状遺構（SK-056）実測図（1/50）

２）土坑

SK-032（第５図）

調査区南側で検出した楕円形の小土坑で、大型の柱穴ともみられる。全長1.1m、幅0.5m、検出面からの深さは30cmで、土坑内部は東側にテラスをもち西側に一段深い掘り込みをもつ。東側の小ピットは別の柱穴の可能性もある。

出土遺物（第６図）1～3は弥生中期の甕形土器の底部破片。1は底部がわずかに上げ底で、細めに立ち上がる。内外面とも風化で調整不明。2もわずかに上げ底の底部で、内外面とも風化により調整不明。3は上部の破断面が整っており、人為的に打ち欠いて整形したものである。外面には縦方向のハケ目、内面に指圧痕が残る。

出土遺物から、弥生時代中期前半～中頃の土坑（柱穴）と推定される。

SK-037（第５図）

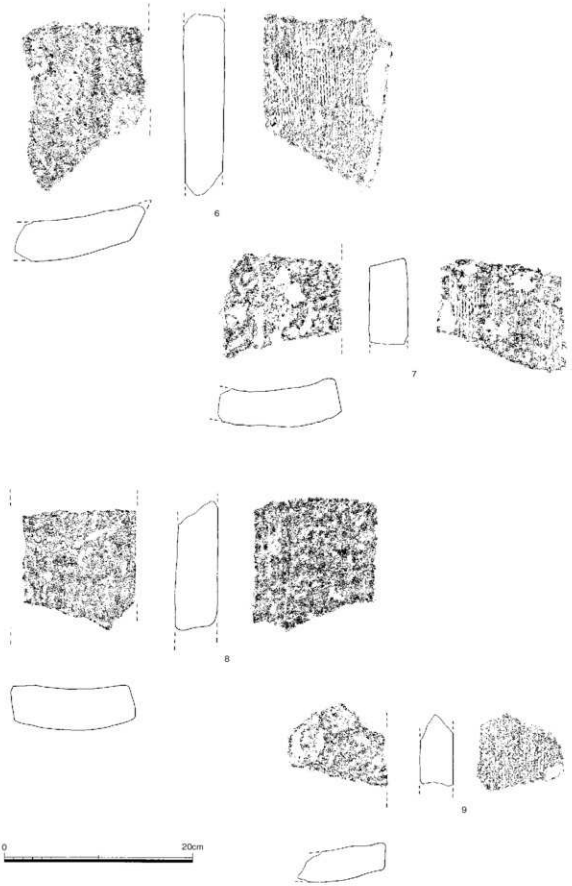
調査区中央で検出した隅丸方形の土坑。南北方向1.1m、東西方向1.0mの規模で、検出面からの深さは30cmを測る。床面は平坦で、壁面は上方に広がり、全体に鉢形を呈する。

出土遺物（第６図）4は弥生時代中期初頃の甕形土器。底部は上げ底で外側に開き、体部は砲弾形で口縁下に突帯を1条貼り付け、口縁形は断面三角形を呈するという、城ノ越式甕形土器の典型である。内外面とも風化が進み、摩耗・剥落が著しく、器面調整は不明である。

SK-044（第５図）

調査区西側で検出した長方形の土坑。全長1.5m、幅0.9m、検出面からの深さは13cmである。床面は平坦で、壁面は直立して立ち上がる。全体にかなりの削平を受けているが、本来は土壙墓の可能性もあると考えられる。

出土遺物　遺構内からは弥生土器～土師



第８図　階段状遺構出土遺物実測図（1/4）

器の小片が出土しているが、副葬品に類する出土遺物は見つかっていない。図示できる遺物もなく、遺構の時期は不明である。

3）階段状遺構

SK-056（第7図）

調査区北側から北西隅にかけて広がる遺構。調査区内での検出時点で、全長8.7mを測り、調査区外に更に延びる。遺構は東から西にかけて緩く傾斜する溝状遺構の底部に横方向の細く浅い溝が平行に掘られる形状で、東端から西端床面までの比高差は45cmである。西端から2.5mまでは床面は平坦になっており、そこから東側に緩く上るとともに等間隔に幅40～50cmの溝が切られている。溝の長さは1.0～1.5mで、これが通路の幅とみられる。溝の深さは3～5cmで非常に浅く、ほぼ平坦な面を呈している。これが階段のステップの役割を果たしたとみられる。溝の内側や床面には小礫や瓦が敷かれた状態で検出され、当時は舗装された通路として機能していたと考えられる。

溝の覆土は、上層は黒褐色土、下層は褐色土が堆積しており、下層は遺構廃絶後、短期間に地山土が流入したもの、上層は長期にわたって堆積した層とみられ、人為的な埋め戻し造成は見られない。

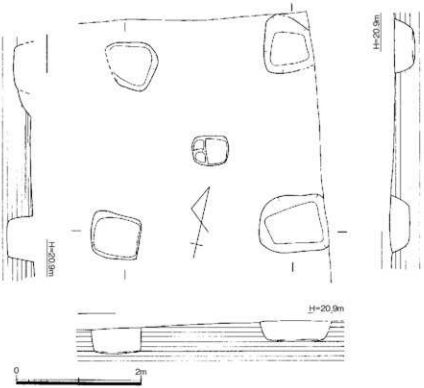
出土遺物（第8図）溝内部からは弥生土器、土師器の小片が多数出土したが、いずれも小片で摩滅が著しく、図示できるものはない。

第8図は床面や溝内部に敷かれていた瓦破片である。瓦破片はパンケース2箱分出土したが、いずれも風化が進んでいる。6は平瓦の側面端部。上面はナデで細かい凹凸が見られる。下面には縄蓆文タタキ痕が残る。胎土は橙色を呈する。7は下層東側で出土した平瓦の側面端部、上面はナデとみられるが器面の剥落が著しい。下面は縄蓆文が残る。胎土は鈍い橙色を呈する。8は両側面が残っており、幅13.2cmであることを確認できる。通常の平瓦よりも幅が狭いことから、熨斗瓦等の可能性もある。上面はナデで、工具痕らしきものが残る。下面は縄蓆文の痕跡がわずかに残る。胎土色調は明褐灰色～鈍褐色を呈する。9は小片だが側面の切断面が残っており、図化できた。上面はナデ、下面は縄蓆文が残り、鈍い黄橙色を呈する。

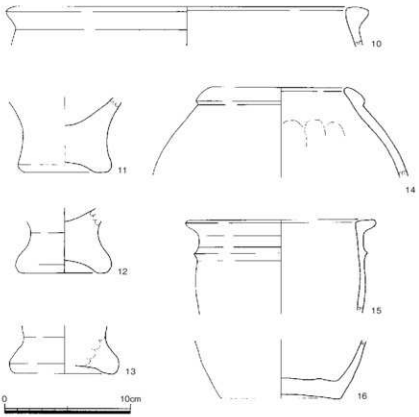
4）掘立柱建物

SB-071（第9図）

調査区北東側で検出した建物で、調査区内で1×1間の柱穴群を確認しており、調査区外北側あるいは東側にさらに広がる可能性がある。柱穴の形状は歪んだ隅丸方形を呈し、各柱穴の軸は東西



第9図　掘立柱建物（SB-071）実測図（1/60）



第10図　調査区内出土土器実測図（1/3）

方向を向いて揃っている。柱穴規模は幅0.8～1.1m、検出面から30～40cmの深さで遺存している。

柱間は東西2.5m、南北2.8mを測る。また、建物の中心に柱穴と軸線方向が同じ小型の方形の柱穴があり、位置関係からこの建物に関連するものと考えられる。

北東隅の柱穴（SP-068）の底部からは礎石とみられる長さ25cmの石材が出土しており、またこの柱穴に重複する径40cmの円形の柱穴が検出されていることから、40cm径の柱が立てられていたと推定される。

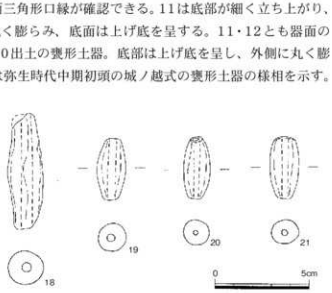
出土遺物　各柱穴からの出土遺物は、弥生土器、土師器の小片で、図示できるものはない。これらの遺物は建物築造時のものではないとみられる。

遺構の時期を直接示す遺物はないが、柱穴の形状と規模、そして階段状遺構と軸線がほぼ同じことから、両者が近い時期のものであることが想定できる。

5）その他の出土遺物

図10～12では各柱穴からの出土遺物と、石器、土製品について報告する。10～12はSP-034から出土した甕形土器。10は口縁部破片で、断面三角形口縁が確認できる。11は底部が細く立ち上がり、底面は上げ底を呈する。12は底部が外側に丸く膨らみ、底面は上げ底を呈する。11・12とも器面の剥落が著しく、器面調整は不明。13はSP-070出土の甕形土器。底部は上げ底を呈し、外側に丸く膨らむ。器面は剥落が進み、調整不明。10～13は弥生時代中期初頭の城ノ越式の甕形土器の様相を示す。

第11図　出土石器実測図（1/1）



第12図　出土土製品実測図（1/2）

14はSP-051出土の弥生土器の無頸壺口縁部。体部は丸く膨らみ、口縁部は折り曲げて粘土帯を作る。器面は内外面ともにナデ調整で、内面に指圧痕が残る。

15・16はSP-057出土の小型の鉢形土器で、同一個体の可能性が高いが、破片が直接接合しないため、別個体として図示する。15は上半部で、口縁部は逆L字を呈し、口縁直下に低い突帯を貼付する。16は底部で、底面はわずかに上げ底を呈し、体部は底部から膨らみ気味に開く。内面見込みに強いナデによる整形痕跡が残る。14～16は弥生中期中葉～後半の様相を示す。

図11はSK-032出土の打製石鏃。黒曜石製で、全長3.2cm、幅2.1cm、重さ1.7g。長三角形で、基部に浅い刳りが入る。共伴する土器よりも時期的に上るもので、流れ込みによるものとみられる。

図12は土錘。長さは3.3～6.1cmで、中型～やや大型に属するものである。時期は不明。

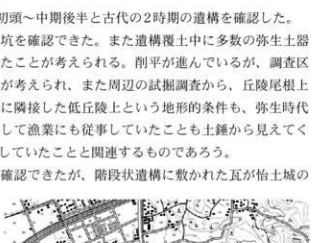
4　小結

千里向川原遺跡第2次調査では、弥生時代中期初頭～中期後半と古代の2時期の遺構を確認した。

弥生時代の遺構として方形竪穴住居と柱穴、土坑を確認できた。また遺構覆土中に多数の弥生土器小破片を含んでおり、集落が継続的に営まれていたことが考えられる。削平が進んでいるが、調査区内の柱穴の数からみて相当数の住居があったことが考えられ、また周辺の試掘調査から、丘陵尾根上の広い範囲に集落が存在した可能性がある。平地に隣接した低丘陵上という地形的条件も、弥生時代の集落が存在した可能性を示唆している。生業として漁業にも従事していたことも土錘から見えてくるが、これは古今津湾が丘陵のすぐ北側まで湾入していたことと関連するものであろう。

古代の遺構として、階段状遺構と掘立柱建物が確認できたが、階段状遺構に敷かれた瓦が怡土城の瓦に特徴的な、分厚く粗雑な胎土・焼成であることから、この階段は怡土城の築城以後に作られたものである。また掘立柱建物は柱穴の形状が古代の公的な施設に特有な方形の掘方であることと、階段状遺構と同一軸で建てられていることから、両者が関連する可能性が高い。

今回調査した尾根は怡土城の外郭線に直結するため、この尾根が城郭線への通路として使用されていたとすれば、従来から考えられている望楼を結んだ山城の外郭線の外側に山城の関連施設が存在した可能性は当然あるものと考えるべきであろう。そのような意味で、今回の調査地点が位置する尾根を含め、高祖山北側の尾根及び谷部分については古代の公的な機関・施設や土塁・堀等の構造物の存在を考慮すべきであろう。



第13図　千里向川原遺跡周辺地形図（1/25,000）

図版 1

調査区全景（西から）

調査区全景（東から）

SK-056 遺物出土状況
（東から）

SK-056（西から）

SK-056（東から）

図版３

SK-037（南西から）

SK-044（南から）

SP-057（南から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふじさきいせきにじゅういち・せんりいせきに・せんりむこうがわらいせきいち
書　名	藤崎遺跡21・千里遺跡2・千里向川原遺跡1
副書名	藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第2次調査・千里向川原遺跡第2次調査の報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1325集
編著者名	米倉秀紀・大塚紀宜
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡市中央区天神1-8-1
発行年月日	2017年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
ふじさきいせき 藤崎遺跡	ふくおかしさわらくももち 福岡市早良区百道1丁目857-4	40135	307	33° 34′ 54″	130° 20′ 56″	2003.03.03 ～ 2003.03.12	90	記録保存調査
せんりいせき 千里遺跡	ふくおかしにしくおおあざせんりあざきただ 福岡市西区大字千里字北田398番1の一部	40135	745	33° 33′ 48″	130° 14′ 31″	2010.10.18 ～ 2010.10.28	139	記録保存調査
せんりむこうがわらいせき 千里向川原遺跡	ふくおかしにしくおおあざせんりあざてんがい 福岡市西区大字千里字天蓋183番3	40135	695	33° 33′ 35″	130° 14′ 43″	2014.01.16 ～ 2014.1.31	55	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤崎遺跡	墓地	弥生時代	甕棺墓・土坑	弥生土器	弥生時代中期の甕棺墓3基など
千里遺跡	墓地	弥生時代・中世	甕棺墓・土壙墓	弥生土器・石器	弥生時代前期の甕棺墓・土壙墓・中世の土壙墓
千里向川原遺跡	集落	弥生時代・古代	掘立柱建物・竪穴住居・階段状遺構	弥生土器・石器・瓦	怡土城に関係する階段状通路

要　約

藤崎遺跡は、弥生時代・古墳時代の甕棺墓・方形周溝墓などからなる遺跡で、本調査区は遺跡の北端にあり、小児甕棺3基を検出した。

千里遺跡は糸島平野の東端にある。当調査では弥生時代前期の甕棺墓5基・土壙墓3基と同時代の遺物包含層、中世の土壙墓1基と時期不明柱列を検出した。中世の土壙墓には鉄鎌が副葬されていた。

千里向川原遺跡は高祖山から派生する丘陵上に位置し、今回の調査では弥生時代の竪穴住居2基と、古代の掘立柱建物、階段状遺構を検出し、怡土城の北側の関係施設があったとされる。

藤崎遺跡21・千里遺跡2・千里向川原遺跡1

藤崎遺跡第33次調査・千里遺跡第2次調査・
千里向川原遺跡第2次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1325集

平成29年3月27日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　有限会社森田印刷所
福岡市中央区大手門2-1-21